

農林水産大臣賞（優秀賞）

水の恩恵

鹿児島県

学校法人津曲学園鹿児島修学館中学校

二年

松久保

幸来

梅干し、明太子、納豆、キムチ、アツアツのおみそ汁・・・どれも炊きたての白いご飯にピッタリだ。

私は白いご飯が大好きだ。夏が終わり、新米の出回る季節になると、私のテンションは一気に上がる。炊飯器をパカッと開けた瞬間に香る新米の香り。湯気の向こうに見える一粒一粒のお米がツヤツヤと光り輝く。こうして新米の炊き上がった様子を思い浮かべるだけでもヨダレが出そうになる。

そんな白米好きの私にとって、五月二日の伊佐市、湧水町の「川内川から取水する水田六百二十ヘクタールの水稲栽培を中止する」という決定はショックだった。

今年の秋には伊佐の新米の収穫量が減り、なかなか口にするのができなくなるかもしれないのだ。

湧水町や伊佐市の川内川では、霧島連山えびの高原・硫黄山の噴火以降、魚の死がい的大量に見つかっているという。えびの市の長江川では、同じく噴火以降、環境基準をこえるヒ素などが検出されている。その影響を受けて、今回の水稲栽培の中止は決まった。

私の知っている川内川は、さつま町宮之城を流れる、祖父が小さい頃（約七十年前）に夏の間毎日水遊びをしていたという川だ。

宮崎県の硫黄山の噴火が、鹿児島県の川内川に影響を及ぼすなんて、とても不思議に思い、地図を使って川内川を上流に向かってたどってみた。すると、川内川は宮之城よりも北にある鶴田ダム、曾木の滝、伊佐市を通って湧水町、宮崎県のえびの市、そして熊本県の球磨郡あさぎり町の白髪岳が始まりであるということが分かった。さらに詳しく調べてみると、川内川は、流路延長約百三十七キロメートル、流域面積は約千六百平方キロメートルもあるとのこと。

百三十七キロメートル。なんて長い距離を水は旅をしているのだろうか。

百三十七キロメートルの間に、川の流域に暮らす人々の飲料水などの生活用水、稲作などのための農業用水、製紙業などに使われる工業用水、その他水力発電などに使われ、たくさん恵みを私たちにもたらしてくれている。

蛇口をひねれば水が出てくるのは当たり前。朝起きて水で顔を洗い、水を使って作られた食事を食べ、汗をかいたらシャワーを浴び、のどが渴いたら水を飲む。普段から私の生活の中で水は生きるために欠かせない大事なものはあるが、水が生活の中に存在することが当然のことになりすぎて、水の役目について改めて考える機会はなかった。しかし、思った以上に水は私の生活に密着しているようだ。私の大好きな白米のためには、農業用水として美しく、きれいな水がなければならぬ。この作文用紙を作るときにも、製紙工場でたくさん水を使っているのだ、ということに改めて気付かされた。私が直接手を触れたり、目にすることがない色々な場所で、水は大活躍している。

今回の川内川水系の白濁が、少しでも早く元の状態に戻り、安心して農業用水として使える日が来ることを願うと同時に、水が私達の暮らすこの地球上に存在し、私達の生命を支えてくれていることに心から「ありがとうございます。」と感謝の気持ちを伝えたい。そして、このきれいな水がいつまでも地球上の全ての生き物にうるおいを与え続けていけるように、水をきれいに使える人間でありたいと、私は強く思っている。